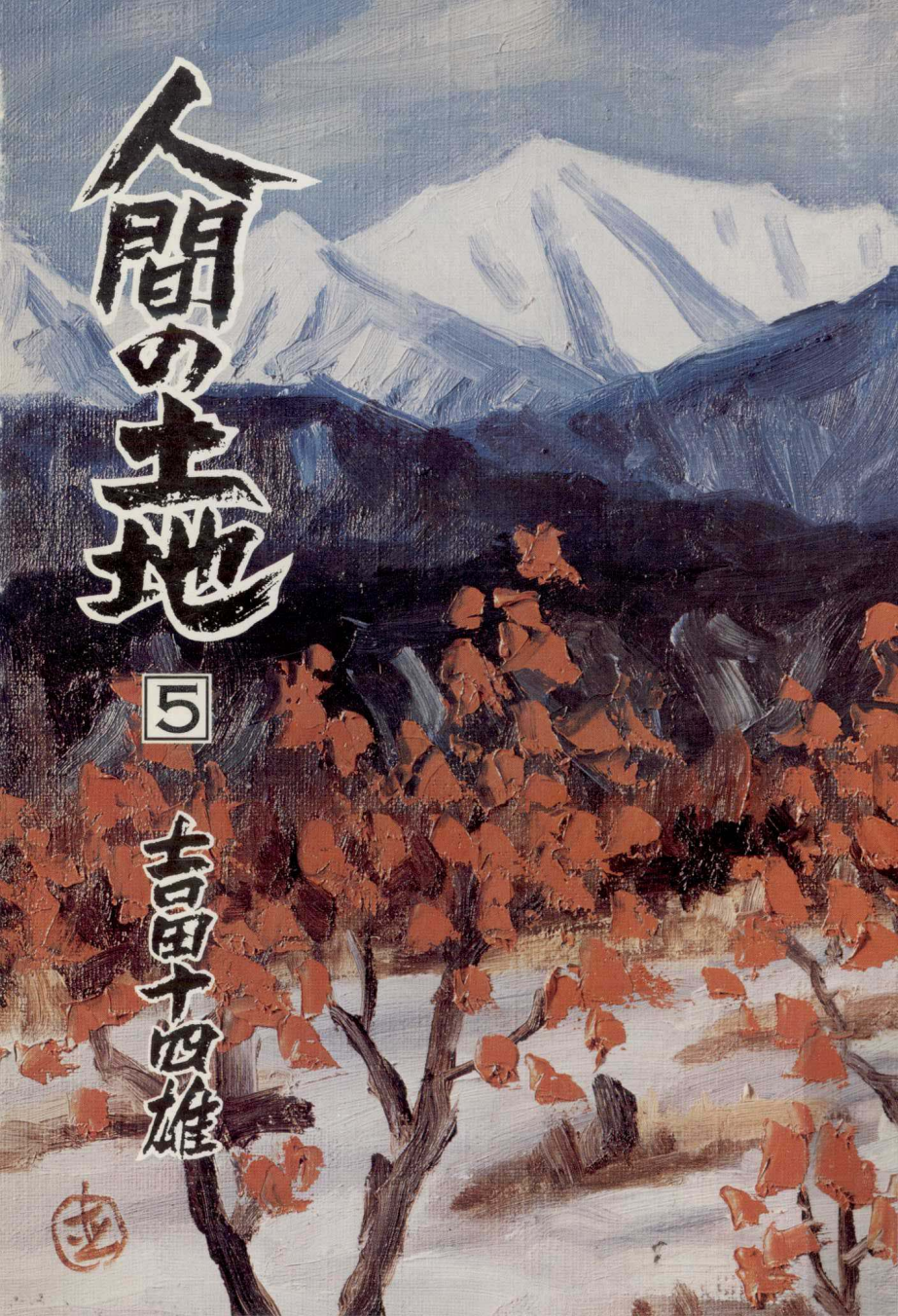
# 人間の土地

5

吉田十四雄



# 小説 人間の土地

## 第二部

## I

吉田十四雄

人間選書
36

小説 人間の土地　第二部Ⅰ　　人間選書36

昭和55年２月20日　第１刷発行

著 者　吉田十四雄

発行所　社団法人　農山漁村文化協会

郵便番号 107　東京都港区赤坂７丁目６－１
電話 東京(585)1141(代) 振替 東京2-144478

1393-311360-6805
<検印廃止>
印刷／三和印刷
製本／笠原製本
定価はカバーに表示
©吉田十四雄　1980

# 人間の土地

## 第二部 I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

第一章　肌馬……5
第二章　盗伐……41
第三章　それぞれの春　その一……103
第四章　それぞれの春　その二……172
第五章　転形……213

# 第一章　肌　馬

## 一

翌朝、三蔵と山下が馬で駆けつけて来た。

「御苦労さんでござるました。おらっちゃ、旦那に約束忘れられたら大変やと、夜もおちおち寝られんかった」

と、山下は言い、

「それで早速、馬の金を持って飛んで来ましたがや」

と、三蔵も笑顔を見せ、二百五十円ずつの金を橘に渡そうとした。

「いや、ご両所からはすでに二十円ずつも手金を貰うとる。これでは貰いすぎじゃ」

「天下の橘牧場の馬じゃ。一番の種馬なら二千両、肌馬（繁殖雌馬）なら千両はしますやろう。わしらにそれほどの銭と腕はないで、まあ値段相当のところを分けて下さるませ」

「御好意有難い。これだけあれば帯広の方は形がつき申す」

「すりゃ、晩はうちへ泊って下され。うちのあたりには馬狂がたくさんおりますでなあ、馬の話でもしてやって下され」

「御好意にあまえましょう。では早速借金の形をつけて、二時頃徳丸へ寄りましょう。いやおかげで帯広の方は肩の荷が下り申した。お礼を言います」

二時少しすぎ、橘が徳丸飲食店へ行くと、三蔵と清吉は、ちびり、ちびりやっていたのであろうが、もうかなり酔いが回っていた。

「まあ、旦那、駆けつけ三杯、さ、行きましょう」

「いや、御両所、これから馬へ乗らねばならんのですぞ」

「なあにい！　これくらい、さあ」

「有難いがのう。昨夜はわしがかつがれて行っての、とんだ醜態をさらけることになったらしい」

「へええ、旦那でもそんなことがござるますかいの、それじゃ、とにかくこれ一本」

三時に徳丸を出た。

相変らずよく晴れていた。西の山の頂近くに、冬の弱い日がかかっていた。

まだ日中の余熱ともいうべきものが、少し残って、吐く息もすぐに凍りはしなかったが、日がかくれるとすぐ、わっとばかりに牙をむき出してくる寒気は、人間の呼吸も、馬の呼吸も、汗もすぐ霜にかえてしまうほどの寒さになっていた。

「まだ腹さ、酒の温もりのある間に馬を追うべや」

「いや、待ってくれ、おれはゆっくり酔いをさましながら行きたいわえ」

「また落ちる心配か、今日は二里がほどじゃ、ゆっくりもよけれども、明日あ十三、四里がほども馬さ乗らにゃなんないぞ。おやじ降参なら降参と言えや。吉蔵ばつれて行くからな」

「何を！　まだお前にひけはとらんてや」

と、三蔵は力んで見せたが、三蔵はもともと乗馬が得意ではなく、それだけに馬に乗る回数も少なかったので、乗馬となれば山下の方が格段の上手であった。

三蔵の家へは、山下に、源三、松四郎、吉蔵の他に、おやじを馬橇へ乗せて追い返してから急に親しくなった堀川安吉も来ていたし、おやんじも、小畑も、山岸も来ていた。

堀川安吉は、吉蔵や松四郎に負けぬ馬狂（うまきち）であった。

「旦那のうちでは、開墾専門というような安馬はお飼いなさらんのかなあ」

と、三蔵は問うた。

「いやいや、おりますじゃ。橋の理想は血統のよい実用馬をなるべく安く提供したいということでござるがの、なかなか理想通りには行かん。が安い実用馬はいる」

「来年は百戸近くの新移住が来る。大方は旦那のお世話になったものじゃが、わしらも馬を少し買い足しておいて、新墾の手助けをしてやらにゃあならん。また移住して来る者のうちには馬の買えるやつもおろう。それにこの人々にも一頭ずつ持たせたい。そうなると七、八頭はほしいところじゃが、これはふところとも相談せにゃならんことじゃで、そうすぐというわけにも…」

「いや、おやじ、その通りや、馬がのうては新墾が出来ん。しかし、わしの世話したやつは馬を持っとるで…」

と、堀川は言い、

「うん、ええ話じゃ。わしの世話したものにも馬を持っ

とるものもいる。また馬を持たんやつはわしが新墾を手伝うてやり、また馬も持たす心配もするつもりじゃ」
堀川の親戚という男も言った。
「今度の予定存置をして貰うたやつは幸福者じゃのう」
三蔵はそう言って笑い、
「それでは百両ぐらいのものもござりますかいな」
「うん、ある。なくともあるようにせにゃなるまい」
「いや、それが旦那の悪い癖じゃ。そう言われると買うものも買えんことになる」
「いや、これは失言じゃ。いや百円でも十分儲けさせて貰える馬がある。さようさ、三十頭ほどはおろうて」
「それじゃ、わしがもう一頭に、小畑と山岸が一頭ずつ」
「いや、おらももう一頭や、ええい、その一頭もひとに自慢でけるええ肌馬や」
「それなら俺のもええ肌馬や。山下に負けてたまるか、のう吉蔵」
「ふふふ、俺よりお母やんに聞いて見な、お母やんむずかしい顔をしとるわえ」
「何を言うぞい吉！　馬はめんこい財産や。わしが何で反対するかいの」
「しめた。うまく行った」
「あれっ、それなら吉、われ最初からお母やんをいっぱいひっかけるつもりやったんかいな」
「あわわわわ」
と、吉蔵は自分の口を叩き、
「ほい！　しまった、しまったわい。しかし山下や、ええ肌馬二頭も買う銭こがあるとは大したものやな」
「ええい、こうなったらうちの馬もう一頭売るわい」
「買った。その馬わしが買った」
と、源三は手をうった。
「今までの馬はみんな松の名義になっとるでなあ、今度はわしの馬や、山下やたしかにわしが買ったぞ」
山下はしぶい顔をした。
「旦那がうんと言うてくれたらの話や」
「よし、小畑に山岸、明日は橇で行くとしよう。橇さ湯たんぽ入れてな」
「ええい糞！　今夜は散々や。明日は三蔵旦那の尻の皮ひんむいてやるべと思うたに残念したな」
山下は一層しぶい顔をした。

「そいでは二、三日みんな留守になる。松さも吉蔵も旦那の牧場は見たかろう」
「ああ、見たいも、見たいも、のう松さ」
「ハハハ、見て下され、うちにはフランスから来たペルシュロン種にアングロノルマン種の種馬がいる。見て貰いましょうぞ」
「わああ、大したものや、勉強になるぞ、こいつは」
「そんなわけで、源三さ、あんた一人で残ることになる。炭窯の方はよろしゅう頼みますわな」
「へい、承知しました」
「ニシパ、ニシパの牧には土産子いねえのかね」
突然山風熊吉が声を出した。
「俺、とっても猟に慣れた土産子知っとる。よっぽど上手でなけりゃあれだけ仕込むことはでけん」
「うん、土産子はいる。その馬、糟毛のもう年寄馬でないかな」
「んだ。糟毛の年寄馬だ。あれ旦那が仕込んだ馬か」
「そうらしいのう。その馬どこにいる」
「へい！ 今わしが乗って来とります」
松四郎が言った。
「見たいのう。すぐ会わせて下され」
橘はもはや靴をはきかけていた。松四郎らが後を追うかたちとなった。
雪明りと、淡い野外作業用の洋燈の光に照らし出された糟毛を眺めると、橘文吉はその額に手をおき、
「マヤ！ 生きておったか。わしじゃ、橘じゃ、わかるか、そうか！ わかってくれるか。あの時は手放してすまなんだのう」
と、額を叩きつづけた。
「まさにわしの仕込んだ馬じゃ。あの時はすまなんだ。お前だけは手放すまいと思うとったが、妙なことでだましとられてのう。うん、今は幸福そうじゃの、年寄馬にしてはよう太っとる。それにドンゴロスをまいて貰うとるか、いや、よかった。今日はええ家へ泊めて貰った。今日の出会いはうれしい」
橘は糟毛の額を叩き、頸をなで、足をさわり、
「うん、まだまだ艱には負けん力を持っとるのう。あんたの所に？」
「へえ、ここの吉蔵さからわけて貰いましたが、そんなええ猟馬とは、おやんじ、いや山風さんに言われるまで


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知りませなんだ」
「うん、あんたが山風さんか？」
「へえ、わしゃこのニシパにこの馬貸して貰うて、こっちのニシパにも鉄砲買うて貰うてな、初めて猟に出た時、この馬の耳の動かし方、歩き方、獲物の近くへ来た時の気の配り方を見てのう、こりゃあ一廉の猟師に仕込まれた馬じゃ。これに乗っとりゃ熊に負けることもない。山へ放しておいてもちゃんと熊はさける。また人間をほっておいてひとりで帰るような馬でないとな、すぐわかりましたわい」
「そうか、そうか、そこまで見ぬいてくれたか、いや有難う」
と、橘は熊吉の手を握り、
「今でも熊から逃げはせぬかの？」
「ああ、逃げるものか、耳をぴっと立てて熊の通った跡を追いよりますわい。したが熊に出会うた時、よほど上手でないとこの馬からおとされるべ」
「左様！　そうかも知らんのう」
「さては旦那の仕込まれた馬だったか。和人でもここまで仕込む人もあったのやのう」
「いや目もあてられんなあ、おやんじ…」
と、吉蔵は頭をかき、
「したばあしたはこの馬で旦那の牧場さ行って貰うべし、のう松さ」
「ああそうしよう。糟毛もよろこぶべ。したがおやんじ、一目でこれが猟馬だったとようわかったな」
「アイヌ、畑作らしたら和人の半分、漁、猟、やらしたら和人が半分じゃ」
「ハハハハ、その通り、その通り、時にこの馬の馬票は？」
「ございません」
「左様か、生れた時は松風、たしか三十年か三十一年の生れじゃが、七、八歳までわしの牧場にいての、あまり上手に熊の跡をつけるので、いつの間にやらマヤ、マヤと言うようになっての、今は糟毛と言うておられるか　馬の？」
「いや、おやんじに乗って貰ってまたマヤにいたします　肌
る」
「ああ、そうしてやって下され、いや今日は嬉しかった。有難かった」

一座の酒宴は一層楽しいものになった。

牧場から帰ると、吉蔵も松四郎も一層仕事が忙しくなった。

牧場では、馬は繁殖するけれども、使役に調教する暇はほとんどない。牧場で使役する以外の馬は、乗れるように調教してあればいい方で、ほとんど二歳から明三歳馬で売ってしまう。馬が本格的に使えるのは四歳からだが、プラウを曳き、馬車や馬橇を曳き、人を乗せ、また何かに驚いて遁走することのないように、教えこむのはみんな買った者の責任であった。

これは馬を飼いなれた、馬術の名人で、しかも辛抱強い性質の人間でなければ、出来ないことであった。

癇癪持ちで、すぐ馬を殴ったり、手綱をしゃくったりする者は、馬が仕事を覚える前におびえてしまって、おちつきのない馬にしてしまうし、仕事の下手な者が扱うと、仕事の下手な馬に仕上ってしまう。

したがって、黒崎家が手に入れた二頭のりっぱな洋種も、小畑と山岸が、三蔵の援助で手に入れた土産馬も、全部吉蔵の調教にまかされることになった。

小畑と山岸が、

「親方の助けを貰ってやっと手に入れた馬を、息子のあんたに手間、暇かけて仕込んで貰うとはなんともはあ、すまないす。さればこの償いに、なんぼでも働きまするで、どんな仕事でも申しつけて下され」

と、申し入れて来た。

「ああ、炭窯の方を頼むでな、それから木挽も時々やってくれや」

吉蔵はいばってそう言い、

「したどもおれ、楽しみがあるんだでや」

「楽しみ?」

「四頭とも橋さんらしい正直な馬ばっかりやで、一ヶ月もすりゃお前さんらに渡せる。その時どっちが先に雪の中さ落馬して雪まみれとなるかと思うてな。いや楽しみなことやわい」

「とーんでもない。おら馬がには乗らんがでし、馬は息子らに扱わせるがでし」

「乗らんてか。うん、ほんとに乗らんてか」

「はあ、おら高いものに乗るは、先祖代々きらいで!」

「おおそりゃな、おっ母の腹より馬の方が高いわえ、し

たがお前さんら、枝下しに上る木よりずっと低いわえ。ご先祖が木さ上ったらいかん言われたか?」
「いや、なに、その…」
「お前さんら乗らんとなったら、おれも調教やめた。おらそれ楽しみに調教しよるんやぞ」
二人はなんとも情ない顔をした。
「女房や餓鬼の見とる前で、おら馬から落ちたらなんとすべ。亭主関白の値打ち一遍に下るべや」
「阿呆言え、お父っつあんもめんこいところあると笑うだけや。一ヶ月先となりゃ雪も深かろうでな。うちの前の道路を三百間、裸馬で、駆足で飛ばさせるでな」
「おら怪我したら仕事に差支えるべせ」
「雪が深いわえ。怪我なんかするかいや。あ、あ、あ、でーんと落馬してな。雪の中さもぐって見えなくなろうわい。雪の中からもっそり出て来る顔は見物だべや」
「吉蔵さんはどうでもおらを馬へ乗せる気と見える。したが馬は生れた所さ帰るという。落馬した隙に馬、大樹さ逃げたらなんとするべか」
「駄目だ。そんなことで逃げるもんではないわい。健作も孝作もその時は馬さ乗るな」
「ああ、乗る。乗る。今からあんたの家へ届ける時も、つれて帰る時もおらちゃんと乗ってるわい。お父ら落ちれば面白いな」
「なんだと、親が落馬するの楽しみだと、この餓鬼め」
「北海道さ来たんでねえか、馬持たして貰うたんでないか、馬さ乗れるようにならんば義理がたたんでねえか」
健作に言われて小畑は頭をかいた。
「そう言われればそうだなし」
一ヶ月ほどで四頭の馬の調教はひと先ずすんだ。
重い荷物を馬橇につまれて、曳き悩んだ時でも、吉蔵が手綱をしぼり、
「それ!」
と、手綱の余りで一鞭食わすと、ぐっと腰をおとして曳き出すこつも覚えた。
「ええ馬どもじゃ。素直な馬どもじゃ」
吉蔵もいたく満足そうであった。
約束通り、小畑と山岸が馬に乗せられる日が来た。一月の下旬で、その年は雪が深く腰ほどもあった。
先ず吉蔵が乗って見せた。
三百間(五百四十メートル)の馬橇道を、駆足で一気

に駆けぬけた吉蔵は、帰り道で馬をとめると、
「ええか、手綱はな、こう臍の所でひかえるんじゃ。手綱が臍の所にあるかぎり絶対に落馬はせん。それを、ああ落ちる、落ちると思うと手綱をひかえた手がだんだん上の方へ上って来る。そして胸から肩のあたりまで手があがると必ず落ちる。見とれや」
吉蔵は馬を少し戻し、速歩を踏ませて走って来、
「あっ落ちる、あっ落ちる！」
と、言いながら手をだんだん上の方へあげると、
「あっ、あっ、あっ！」
でーんと転がり落ちた。吉蔵の姿は雪の中へもぐってしまった。やがて雪にまみれて起き上って来ると、
「おう冷たい！　わかったか、落ち方」
と、笑った。
小畑も山岸も、百五十間ほどはどうやら走ったが、彼らの前で雪の中へもぐってしまい、
「見ろ！　ええとこ見せようと思うさけ、その通り落ちる。したが怪我はしなかろう」
と、吉蔵らに笑われ、健作と孝作はどうやら乗り切って、吉蔵にほめられた。

これが新馬の受渡し式であった。

## 二

吉蔵と松四郎は度々帯広へ出た。木炭を定期的に出さなければならなかったからであった。帯広へ出る日は忙しかった。普通の人のように、木炭を渡してすぐ帰って来るわけにはいかない。
彼らは梶川の家へよって、炭俵や米俵を積む。梶川は、家で飯を食っていってくれとすすめる。すすめるというより頼むのである。
「ご恩返しだ。帯広へ来た時はうちで飲を食うて下さらんか。そりゃご承知のように、うまい飯もあればうまくない飯もある。なれどもとにかく飯の食える仕事を見つけて貰うたんじゃ、せめて飯でも食うて貰わんと気がすまんのや」
「親切は有難いどもな、おらはまた徳丸で飯を食わんことには、あそこのおやじとおかみに申し訳ないでな」
梶川は情なさそうな顔をしたが、
「うん、あんさんらはそういう人だで…」
と、時々米を包んでくれた。梶川の生活はずっと楽に

なったようであった。
食っていく目処のついたことで梶川夫婦はおちつきを得た。おちつきを得たことで彼らは考える余裕が出た。そして彼らはこの仕事をいつ失うかも知れないことを考えると、これまでやっていた仕事をなげるどころか一層精を出した。
考え深くなった彼らはめったに失敗しなくなり、この方も比較的順調にいった。
「出来る限り貯金をしてますちゃ。大通りか西二条に市街宅地を買うか払い下げて貰うかして店を出すつもりですちゃ。今やっとるようなものを商うか、雑貨店にするかは今考えとるところですちゃ」
「結構やな。その時はもうわしらに、空俵は入れてくれんつもりかな」
「だらなことは言わんもんじゃ旦那。この梶川はな、たとえ百万長者…」
と、言いかけて彼は苦笑した。
「なんぼ暮しが楽になったかて、今の商売の恩を忘れるような梶川ではござるませんわい。旦那方が炭を焼きなさる限り、わしは空俵を納めますわい」
「有難いのう。したらお前さん、買うより貰うた方がええ、支庁さ行って宅地を払い下げて貰いなされ」
「へえ、それがその、そう思うがでござるますれど…」
「体がふるえるか?」
「へえ、その通りで…」
後で二人は、徳丸のおやじに市街宅地のことを頼んだ。
間もなく梶川は大通りの七丁目で市街宅地一戸分の払い下げを受けて驚喜した。買うのと払い下げをうけるのとでは、値段に、小さいバラックを建てるか、建てられないかくらいの相違はあった。
「まことになんともはや」
と、梶川が吉蔵と松四郎を拝むと、
「その礼は徳丸のおやじ様に言いなされ」
と、軽くいなされた。
その頃の市街宅地の成功検査は、木の輪のついた小さな小屋を、馬に曳かせて行く、輪の部分は土を掘って埋める。そして小屋の中は小さな店の格好がととのっている。それで結構払い下げを受けられた。
また牧場では、表だけ牧柵を回し、検査の当日は、その牧場の広さに見合うだけの馬を借り集めて来て放牧し

ておけば検査が受かったし、土地の成功検査になると、検査に来た旦那は旅宿で一休みする。一杯飲まされると出歩くのが面倒になって来る。すると旦那は二階の窓から双眼鏡を取り出し、

「お前の土地はどこだ?」

「へえ、あのでかい木が一本立っとるまするが、あの右側あたるでござるましょうか」

「ふん、大分遠いのう。拓いたか?」

「へえ、まあ、どうやらこうやら」

「うん、なるほど拓けとるな。よし、成功じゃ」

と、検査が完了したと言う。

しかし中には、双眼鏡で見て、

「なんだ。まだ拓き足りないなあ、来年もう一回見よう。来年は畑まで行くぞ」

と、言うのが出てくる。

「旦那の遠眼鏡はよう見える。ごまかそうとしてもあかん」

と、評判が出る。実は前に人夫を現地へやって調査させてあるのだが、みんなそれとは知らず感心してしまう。

これに遠検という名がついたという。

牧場の馬は、成功検査がすめば、若干の謝礼をつけて持主に帰され、宅地検査の方も、検査がすめば、小さな建物はまた馬に曳かれて、次の宅地の検査に移転して行く。たまに運の悪いやつが、旦那が何度も目をこすって見て、

「なんとこれは、こないだ見た家と全く瓜二つじゃ。今日は狐か狸にたぶらかされているらしい。検査は明日にすべえや」

と、言う。

そんな話がまだまことしやかに残っている時代であった。あるいはまことしやかでなく、まことであったかも知れない。それぐらいのことをしなければ土地が余って人の足りない頃があったのであろう。

とにかく梶川平五郎は、幸運にも市街宅地を払い下げて貰うことが出来た。更に幸運なことに、電信通りから駅前通りへ引越して行くのを機会に家を新築した人から、古い家をただ同然でゆずって貰うことが出来た。

頬っぺたをひねって見たいような気持で、徳丸飲食店のおやじに礼を言うと、

「ああその礼なら、お前さんとこから空俵を持って行く



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com